

自然教育園の蝶類について

桜井 信夫・久居 宣夫・夏目 節子

A Note of the Rhopalocera of the National Park for Nature Study in Tokyo

Sakurai, N. N. Hisai and S. Natsume

I ま え が き

古い武蔵野の面影をとどめていた白金御料地は、第2次世界大戦後の動乱に続く食糧難時代に至り、都内の各公園等と同様、板塀をはがされ、一部は水田や畠として使用され、出入り自由になった。それでも、御料地内の大部分は林に覆われ、武蔵野の面影を随所にとどめていたことから、昭和24年、この地域全域を天然記念物として指定し、この古い武蔵野の自然を長く後世に残すと同時に一般に公開する目的をもって、自然教育園が発足した。なお、当時の水田や畠は、水生植物教材園や武蔵野植物教材園などの教育施設あるいは本部建物の敷地として活用されたほかは、他の大部分の自然林と同様に自然の遷移にまかせられ、今なお、自然教育園生態系として保護管理されている。

自然教育園こん虫目録は、昭和24年、古川晴男博士、長谷川仁博士、奥谷禎一博士によって調査され、その後、当時本園職員であった、鶴田総一郎、北岡茂男、名倉卯之による調査とあわせ、昭和27年、国立自然教育園動物目録第1集、昆虫綱として取りまとめられている。その後は、本園職員の先輩各位の目撃記録がある程度のほか、2～3の目についての目録が『自然教育園の生物群集に関する調査報告』にあるにすぎない。

一方、ここ20年間ほどの自然教育園をとりまく環境は、ますます都市化の傾向が進み、現在は、緑の孤島となっているといっても過言ではない。

そこで、とりあえず、1971年園内のチョウ類の目撃記録を本園研究員らの協力を得て実施したので、過去の記録も合わせ、ここに報告したい。

II 蝶 類 目 録

本目録は、国立自然教育園動物目録第1集昆虫綱(1952)と1971年に実施した目撃記録とを基にし、また、その間に記録されているものをつけ加えてある。

なお、種名の配列、学名、和名は、北隆館の原色日本

蝶類図鑑(1965)によった。

LEPIDOPTERA

鱗翅目

HESPERIDAE

セセリチョウ科

Erynnis montanus Bremer

ミヤマセセリ

極稀; 本園では、1952年まで記録があるが、その後の記録は明らかではない。しかし、1958年に観察されて以来、今回の調査にも出現しなかった。なお、食草であるクヌギ・コナラは現在でも本園に生育している。

Daimio tethys Ménétrières

ダイミョウセセリ

極稀; 1959年頃まで毎年記録されていたが、1967年秋、食草園のヤマノイモに幼虫が観察されて以来認められていない。今回の調査でも観察されなかった。

Potanthus flavum Murray

キマダラセセリ

普通; 現在でも6～10月に、もっとも数多く見られる種の1つで、幼虫は、ススキ、チカラシバを多く食べる。

Thoressa varia Murray

コチャバネセセリ

普通; 前種と同様6～10月頃まで普通に多く見られる種で、本部建物周辺、武蔵野植物教材園等に多い。

Polytremis pellucida Murray

オオチャバネセセリ

普通; 6月～10月頃まで多く認められ、幼虫はクマザサのほかススキなども食べる。

Pelopidas mathias oberthüri Evans

チャバネセセリ

普通; 現在もよく見られ、オオチャバネセセリより数

が多い。

Parnara guttata Bremer et Grey

イチモンジセセリ

普通; 上記4種と同様、園内にもっとも普通にみられ、秋期の方が成虫の個体数は多い。

PAPILIONIDAE

アゲハチョウ科

Galphium sarpedon nipponum Fruhstorfer

アオスジアゲハ

普通; 6月～9月に出現し、園内のクスノキ、ヤブニッケイ、タブなどの新葉に多く産卵する。

Papilio machaon hippocrates C. et R. Felder

キアゲハ

稀; 1960年代には普通にみられ、ノダケ、シシウドなどを幼虫は食べていたが、現在は秋に稀れに見られる程度に減少している。なお、食草は減少したようすはない。

Papilio xuthus Linné

アゲハチョウ

普通; 4月～9月頃園内どこにでも見られアゲハ科の中ではもっとも数が多い。園内ではキハダ、食草園ではカラタチに多く産卵する。

Papilio protenor demetrius Cramer

クロアゲハ

普通; 4月～9月ごく普通にみられ、アゲハ、アオスジアゲハとともに比較的多い種といえよう。園内ではキハダ、食草園ではカラスザンショウに多く産卵する。

Papilio helenus nicconicolens Butler

モンキアゲハ

稀; 1952年には記録がないが、1959年夏期に目撃、その後夏期にごくわずかに認められる。1971年は5月、6月に事務所前、食草園で記録、幼虫はキハダを食べているようである。

Papilio bianor dehaanii C. et R. Felder

カラスアゲハ

普通; 6月～10月まで比較的多いがクロアゲハほどではない。キハダ、コクサギに産卵し、食草園のカラスザンショウにもつく。

Papilio maackii tutanus Fenton

ミヤマカラスアゲハ

極稀; 1958年8月、'59年4月に記録がありその後1961年まで認められているがそれ以後記録はなく、1971年の調査にも現われていない。

PIERIDAE

シロチョウ科

Pieris rapae crucivora Boisduval

モンシロチョウ

普通; 現在もよく見られるが園内ではズジグロシロチョウの方が個体数は多い。

Pieris melete Mén. triès

スジグロシロチョウ

普通; モンシロチョウと同時期に出現し、幼虫はイヌガラシ、ナズナなどを食べている。

Anthocaris scolymus Butler

ツマキチョウ

極稀; 1952年の目録に記録されているが、1958年にはすでに認められず、それ以後現在までまったく認められていない。

Eurema hecabe mandarina de l'Orza

キチョウ

普通; 現在もよくみられ、春期より秋期に個体数が多く、ハギの花に多く飛来している。

Eurema laeta bethesba Jansan

ツマグロキチョウ

稀; 1960年頃までは比較的多く認められたが、現在は稀で1971年インセクトリウム前のメドハギに産卵中を目撃。

Colias erate poliographus Motschulsky

モンキチョウ

普通; 現在もアカツメクサに飛来し産卵するが秋期の方が多く目撃される。数はそう多くない。

LYCAENIDAE

シジミチョウ科

Narathura japonica Murray

ムラサキシジミ

極稀; 1952年に記録されているがそれ以後記録はなく、現在も見られない。

Artopoetes pryri Murray

ウラゴマダラシジミ

極稀; 1952年の目録に記載されているが、現在は全く見られない。

Japonica lutea Hewitson

アカシジミ

極稀; 1952年に記載され、1958年1回目撃した以外、現在は全く認められない。ただし、食草のクズギ、コナラは園内に多く自生している。

Japonica saepestriata Hewitson

ウラナミアカシジミ

極稀; 前種と同様自然教育園動物目録に記録されているがそれ以後の記録はない。

Favonius orientalis Murray

オオミドリシジミ

極稀; この種も現在はまったく見られない、食草とし

てはクヌギ、コナラ。

Ahlbergia ferrea Butler

コツバメ

極稀: 1952年の目録に記録されているが、ここ数年は全く見られない。食草のガマズミは園内に多く自生している。

Taraka hamada Druce

ゴイシジミ

普通: 現在もよく事務所脇、園東側のササ群落あたりで6月～11月頃まで見られる。

Lycaena phlaeas daimio Seitz

ベニシジミ

普通: 現在も4月～10月頃によく見られ、幼虫はギシギシを食べる。個体数はそう多くない。

Lampides boeticus Linné

ウラナミシジミ

普通: 現在でもみられる種の1つ。ただし本園では8月以後に限る。

Everes argiades hellotia M'n triès

ツバメシジミ

普通: 1952年以後の記録も多く現在でも4月～11月頃まで多数みられる。

Zizeeria maha argia M'n triès

ヤマトシジミ

普通: 現在でも4月～9月にごく普通に見られ個体数も多い。また本園での飼育例では幼虫および蛹で越冬する。

Celastrina argiolus ladonides de l'Orza

ルリシジミ

普通: 現在でも4月～9月によく見られる種でシジミチョウ科の中では前種とこの種がもっとも多数生息している。

CURETIDAE

ウラギンシジミ科

Curetis acuta paracuta de Nicéville

ウラギンシジミ

稀: 1953年にも記録され、'70年、'71年と引き続き記録されているが数は非常に少ない。

DANAIDAE

マダラチョウ科

Caduga sita nipponica Moore

アサギマダラ

稀: 毎年1～2頭の程度で1971年9月16日、三叉路付近を飛んでいるのを目撃。

LIBYTHEIDAE

テングチョウ科

Libythea celtis celtoides Fruhstorfer

テングチョウ

極稀: 1952年昆虫目録に記載されているがその後の記録はなく、現在もまったく見られない。なお食草のエノキは自生し多い。

NYMPHALIDAE

タテハチョウ科

Neptis aceris intermedia W.B. Pryer

コムスジ

稀: 1960年頃まではやや稀、以後少なくなり、年1～2回程度目撃するにとどまり、現在も稀れに見られる。

Vanessa cardui Linné

ヒメアカタテハ

稀: 1958年～1970年の秋期にハハコグサに産卵するのを見かけられたが、数は多くない。1971年でも秋には見られたが、暖めて飼育する以外本園内では幼虫越冬は出来ないように思われる。

Vanessa indica Herbst

アカタテハ

稀: 比較的秋に多くみられるが、現在は個体数がかなり減少していると思われ、そう多くない。

Kaniska canace no-japonicum von Siebold

ルリタテハ

普通: 現在も比較的よく見られ、幼虫はホトトギス、サルトリイバラを食べる。タテハではキタテハとこの種が多い。

Nymphalis xanthomelas japonica Stichel

ヒオドシチョウ

極稀: 1952年記載されているが、1960年以後その姿は全く認められず、1971年調査でも見られていない。食草としてのエノキは自生している。

Polygonia c-aureum Linné

キタテハ

普通: タテハ中で最も普通にみられる種類で、現在も数は少なくない。早春の日だまりに越冬した成虫をみかけることがよくある。

Apatura ilia substituta Butler

コムラサキ

極稀: 1952年の記載以後、その記録はない。

Hestina japonica C. et R. Felder

ゴマダラチョウ

普通: 数はそう多くないが、毎年記録され幼虫はそう高くないエノキに多くみられる。

SATYRIDAE

ジャノメチョウ科

Ypthima argus Butler

ヒメウラナミジャノメ

普通; 現在もよくみかける種の一つである。

Minois dryas bipunctatus Motschulsky

ジャノメチョウ

極稀; 1952年の記録以後の記録はない。

Mycalesis gotama fulginia Fruhstorfer

ヒメジャノメ

普通; 現在もよく見られる。

Mycalesis francisca perdiccas Hewitson

コジャノメ

普通; 現在も5月~10月頃光の弱い林内や曇天などによくみられる。

Kirrodesa sicelis Hewitson

ヒカゲチョウ

稀; 1952年に記録されているが、その後は少なくとも1頭(?) 現在はほとんど見られなくなった。

Neope goschkevitchii Ménétrière

キマダラヒカゲ

普通; 現在も5月~9月頃まで普通に見られ、これらジャノメチョウ科は比較的園内には多くみられる。

つぎに、放蝶あるいは、他で飼育中のものが逃げ出して飛来したのではないと思われる種が園内で目撃されている。これらの種はつぎの通りである。

HESPERIIDAE

セセリチョウ科

Choaspes benjaminii japonica Murray

アオバセセリ

1967年春季から1970年秋季まで、わずかな個体数ではあったが、食草園に植栽されているアワブキに幼虫が発見された。現在はいないようである。なお、本園には、アワブキが1本自生していたが1965年には枯死している。

PAPILIONIDAE

アゲハチョウ科

Byasa alcinous Klug

ジャコウアゲハ

1965年、食草園にウマノスズクサが植栽されて以来、ジャコウアゲハを放したが、その後毎年食草園で繁殖するのが認められた。しかし、ビールスなどによって1971年春植栽されたウマノスズクサの枯死により、現在は生息していない。なお、園内には、ウマノスズクサ等食草になるものはほとんど自生していない。

NYMPHALIDAE

タテハチョウ科

Argynnis paphia geisha Hemming

ミドリヒョウモン

1965年8月、ミドリヒョウモンを1頭目撃したが、それ以前もそれ以後も目撃記録はない。

Damora sagana liane Fruhstorfer

メスグロヒョウモン

1963年7月、メスグロヒョウモン♀1頭を目撃したが、その前後には全く記録されていない。

Argyreus hyperbius Linné

ツマグロヒョウモン

1953年8月、1953年10月、1961年8月にそれぞれ成虫1頭を目撃記録がある以外は、全く記録がない。

以上3種の食草はスミレ類であり、園内には、1965年当時12種類が生育していたが、いずれの種も次代の成虫の飛来目撃記録はなされていないので、おそらく逃げたものが飛来したものと推定される。

Ladoga glorifica Fruhstorfer

アサマイチモンジ

1959年、当時飼育中のものが逃げ出し、8月に成虫4~5頭を目撃したが、1960年以後は、全く認められていない。なお、本園には、食草となるスイカズラ等は比較的多数自生している。

Dichorragia nesimachus nesiotus Fruhstorfer

スミナガンシ

1966年10月、食草園のアワブキに幼虫13頭、1968年11月、同じく食草園に幼虫2頭を発見した以外、この記録はない。おそらく、他で飼育中のものが逃げ出し産卵したのではないかと推定される。

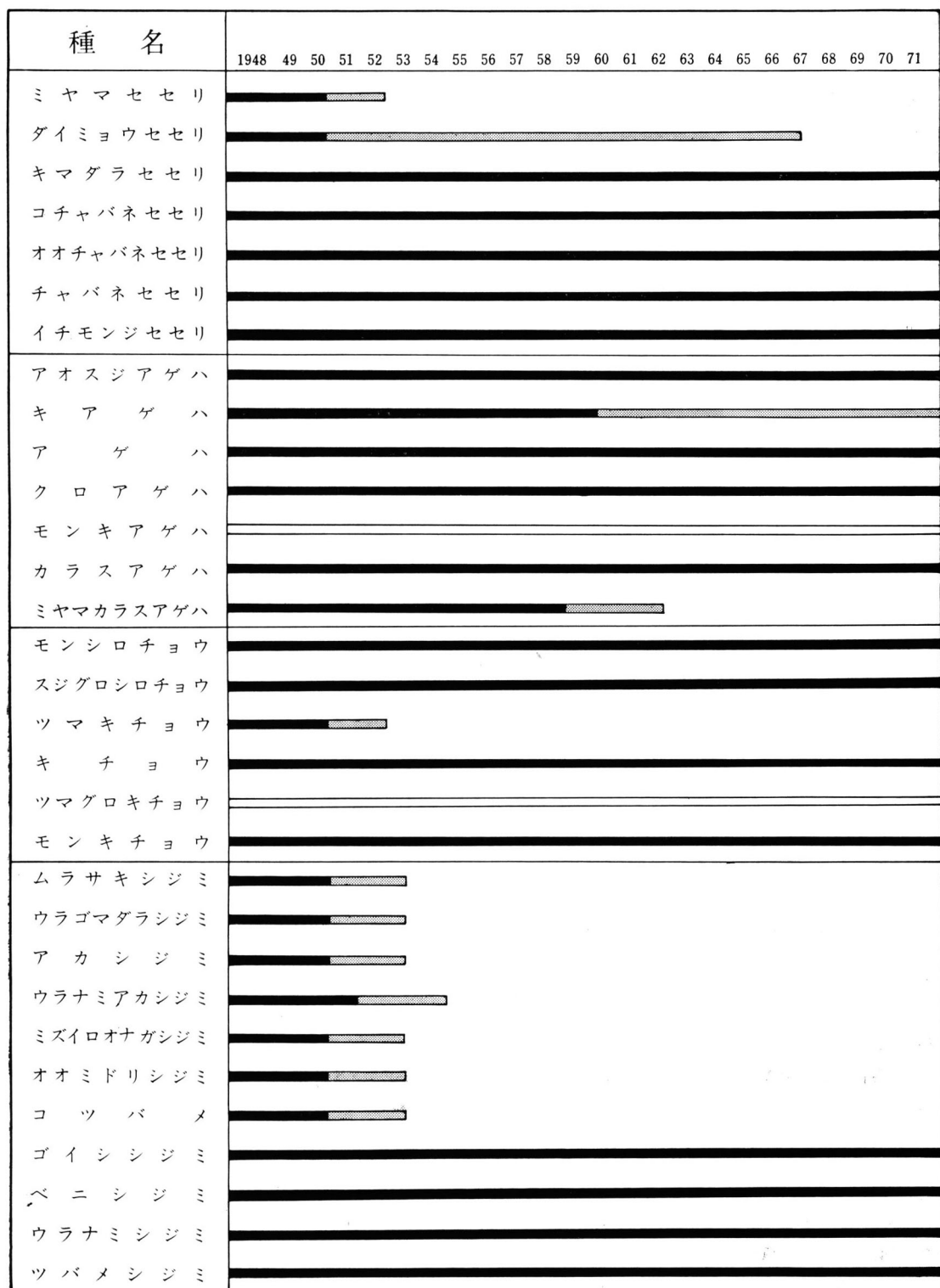
Ⅲ 自然教育園における蝶類の概略

今回の記録調査および実施調査とを比較すれば、1952年に8科49種が記載されていたものが、8科35種が確認されたにすぎなかった。また、1952年の昆虫目録と今回の調査結果とを科別による種類数で示したものが Table 1 である。表によっても明らかなように、アゲハチョウ

Table 1 自然教育園における科別種類数の変化

調査年	1952年種類数	1972年種類数
科 名		
セセリチョウ科	7	5
アゲハチョウ科	6	6
シロチョウ科	6	5
シジミチョウ科	14	6
ウラギンシジミ科		1
マダラチョウ科	1	1
テングチョウ科	1	0
タテハチョウ科	8	6
ジャノメチョウ科	6	5
計	49	35

Fig.1 自然教育園内における蝶類の消長



ヤマトシジミ	
ルリシジミ	
ウラギンシジミ	
アサギマダラ	
テングチョウ	
コミスジ	
ヒメアカタテハ	
アカタテハ	
ルリタテハ	
ヒオドシチョウ	
キタテハ	
コムラサキ	
ゴマダラチョウ	
ヒメウラナミジャノメ	
ジャノメチョウ	
ヒメジャメノ	
コジャノメ	
ヒカゲチョウ	
キマダラヒカゲ	

凡 例 普通にみられる や や 稀

科、マダラチョウ科を除く6科において種類数が減少し、特にシジミチョウ科において著しいが、これはオオミドリシジミなどのいわゆるゼフィルス類が絶滅したことによるものである。さらに、今回の調査でもモンキアゲハの生息が確認された。

つぎに、自然教育園内の蝶類について各種別にその消長をみると概ね Fig.1に示すようであると思われる。すなわち現在自然教育園内において個体数が減少して稀にしかみられなくなった種類は、その幼虫の食草が全くないわけではないのに、キアゲハ、ツマグロキチョウ、ウラギンシジミ、コミスジ、ヒメアカタテハ、アカタテハ、ヒカゲチョウの5科7種に及び、従来から生息個体数の少なかったモンキアゲハ、アサギマダラとともにいづれ絶滅してしまう種類かもしれない。

今回の調査で種類数、個体数ともに比較的多く確認されたものにアゲハチョウ科、ジャノメチョウ科があげられる。このうちアゲハチョウ科の食草はクスノキ科、セ

リ科、ミカン科などの植物であり、自然教育園内に現在でも多く自生していることから、これら種個体群の存続はまちがいないと思われる。一方アゲハ、クロアゲハ、カラスアゲハはカラタチ、サンショウ、ミカンなどを、アオスジアゲハはクスノキ、ヤブニッケイなどを食草としているが、これらの植物は比較的住宅地の庭木あるいは公園緑地の樹木として植栽されているもので、都市の中でも比較的緑の多い住宅地などにアゲハチョウ類が多くみられることの要因となっているとも考えられる。一方、ジャノメチョウ科の食草はススキ、チヂミザサ、アズマネザサ、エノコログサなどのイネ科植物が多いが、林床植物あるいは草地（荒れた耕地など）に多くみられることから比較的緑の多い住宅地にも多いのではないかと推定される。いずれにしろ、この2科の蝶類は現在のところかなりの個体数が本園に生息している。

このほか園内にはモンシロチョウとスズグロシロチョウの2種も多く生息しているが、今回の結果、モンシロ

チョウよりスジグロシロチョウの個体数が多いことがわかった。この2種の蝶はともにキャベツ、アブラナ、イヌガラシなどアブラナ科の植物を食草にしているが、実験的に食草園でこれら食草を植えて調べた結果、モンシロチョウはキャベツを、スジグロシロチョウはイヌガラシを好む傾向にあることが明らかになった。このような嗜好のちがいによってスジグロシロチョウが優占する要因となっているのかもしれない。

現在では絶滅してしまったものと考えられるオオミドリシジミなどのいわゆるゼフィルス類の幼虫の食草はクヌギ、コナラ、アガガシなどのブナ科植物であり、成虫は1.5～3 m くらいの木に産卵する傾向があるといわれているが、園内のこれらの樹種は5～20mの高さのものが

多く、食草がありながらその食草である樹木の成長が次第にゼフィルス類を減少させていった一因となったかもしれない。

わずか20年間程度でこのようなはげしい変動がみられたことの原因については、それぞれの生活史の詳細が明らかにならない現在すぐに結論づけるわけにはいかないが、園内生態系の変化、あるいは都市環境下という特殊な条件を考えると環境汚染による蝶の体内の生理機構の異常による死亡なども考えられるが前述のように推論の域を出るまでには至っていない。

今後、さらにこれらの点について、継続観察をつづけながら明らかにして行きたい。